

萩原松
柯岡

撫
箏
唱
歌
集

一

特42
350

82
498

074535-001-7

特42-350

撫箏唱歌集 1, 2

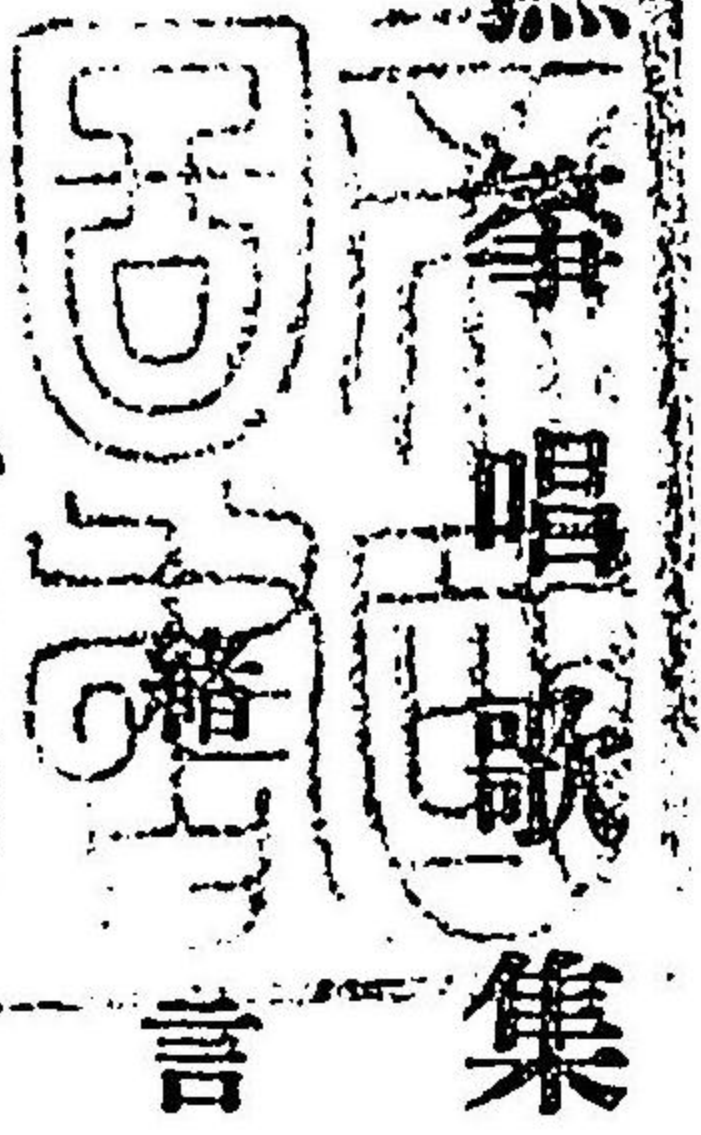
萩原 松柯 (源意) / 編

M37, 38

CEI-1907



撫琴唱歌集



○我國古來琴曲唱歌の書多しと雖もいまた教科書

として適當なるものあらず因て舊曲の中に就き

その佳良なるもの數十曲を撰み歌曲の難易を斟

酌して表裏中奥組の順序を定め以て童蒙の教授

に便ならしむ

○組歌の拍子は一旬八拍子一歌六十四拍子あり本

明治
37 5 24
内交

組歌に傍記したる譜はたゞその八拍子の一端を
示したるものなり

○表組にて春の花、梅か枝、心盡し、天下泰平、裏組にて
薄衣、桐壺、花の宴等の曲は別に傳授すへきものと
して之を省けり

明治三十七年五月

撫箏唱歌集

目次

姫松ひめまつ 若竹わかしげ 櫻さくら 花競はなくらひ 鶴龜つるかめ 螢ほたる

落梅
吉野山
春日陰
歌の道
弓八幡
手習
新年の雪
秋の七草

秋の夜
小野の山
三の船
表組
富貴の曲
雪の朝
東雲
六段調

唱歌なし

裏組

雲くも上うへ

四し季き友とも

友とも千ち鳥どり

八はち段だん調しらべ

亂みだれ輪りん舌ごつ
唱歌なし

○

榮さかゆるる宮みや

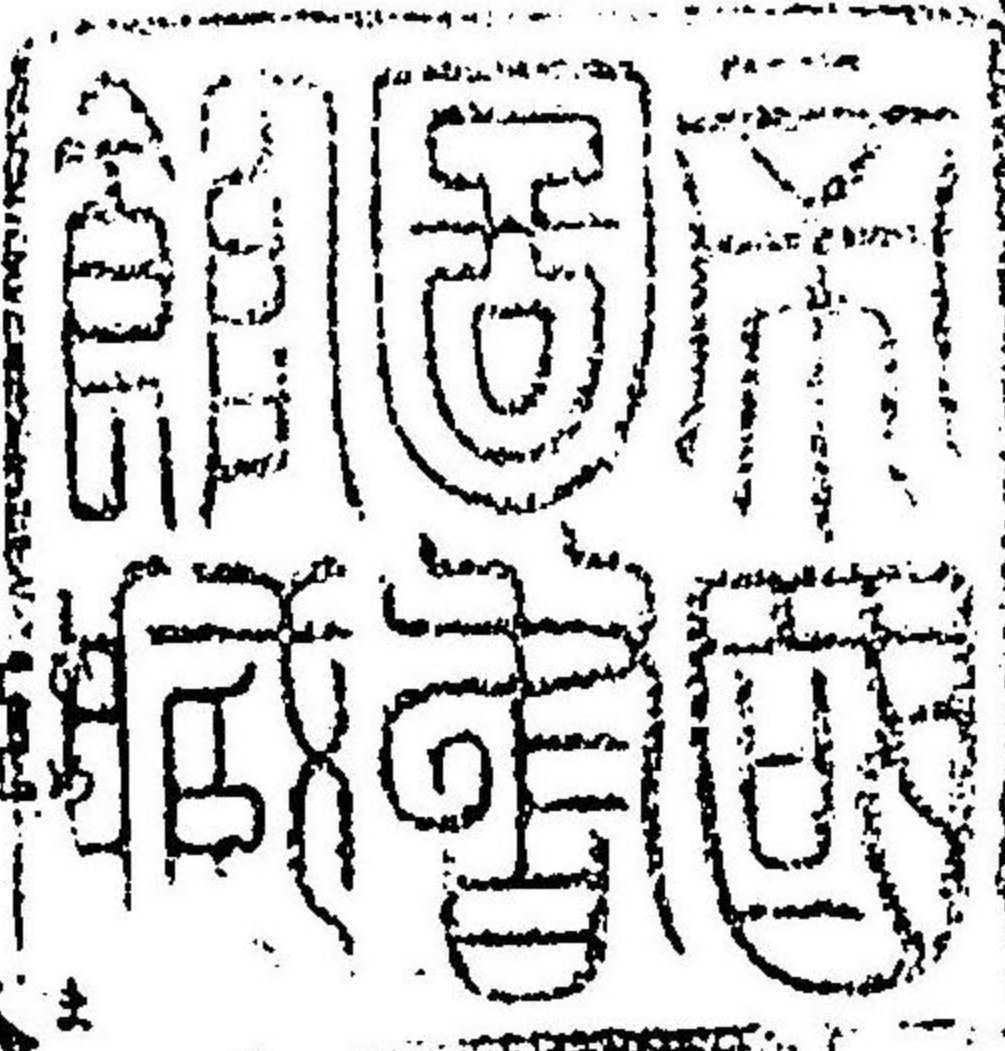
西さい行ぎょう

薄うす霞がすみ

紀き元げん節せつ

四し季き詠ながめ

撫箏唱歌集



姫松

三絃三下リ三絃一合

萩岡松柯撰

ひめまつこまつ。姫まつこまつ。翠のいろ
ませ。春ごとに。

若竹

琴平調子 三合
三絃三下り 三絃一

わか竹をだけ。若竹をだけ。操なたわめぞ。
うきふしに。

櫻

琴平調子 三合
三絃三下り 三絃一

櫻さくら。やよひの空は。見渡すかぎり。霞
か雲かにほひぞいづる。いざやいざや。見

にゆかん。

花競

琴平調子 三合
三絃三下り 三絃一

梅の白妙。さくらのにほひ。桃のうすいろ。
こきまぜて。春のあやおる。いとやなぎ。

鶴龜

琴平調子 三合
三絃三下り 三絃一合

鶴は千代。龜はよるず代。いくとせも。よわ
ひ重ねて。めでたけれ。

螢

琴平調子 三合
三絃二上り 三絃一合

清きながれの。いさら川。袂すしき。ゆふ
暮に。螢とぶなり。イザヤをさな子。とりて

あつめて。終夜。まどのひかりに。書を見よ。

落梅

琴平調子 三合
三絃二上り 三絃一合

年たちかへる。春の空。垣根の草は。いろづ
きて。柳の絲も。うちけぶり。薫もゆかし。梅
の花をりもをり。とて。笛の音の。雲にひ
ける。こゝちして。花も散なり。はなもちる

なり。笛ふえのねに。

吉野山よしのやま

琴平調子 三弦二上り 三弦一合

雲くもと見みてしはよそめにて。花はなわけのぼる。
よしの山やまかすみの奥おくはしらねども。見みゆ
る限かぎりぞ。櫻さくらなる。

春日陰はるひかげ

琴平調子 三弦二上り 三弦一合

ときはなる。松まつのこずゑに。ひなづるが。み
ぎはの龜かめと。もろとも。に。千代ちよを樂たのしむ。春はる
日ひかげ。

歌うたの道みち

琴平調子 三弦二上り 三弦一合

鶯うぐいすも。蛙かはづも。うたふ。歌うたの道みち。月つき雪ゆき花はなの。を。り。を

りは。こゝろうらゝに。うたへたのしめ。

弓八幡

琴平調子 三合
三絃三下り 三絃一

松たかき。枝もつらなる。鳩の峯くもらぬ
御代は。久かたの。月の桂の。男山げにもさ
やけき。影に來て。君萬歳と。祈るなる。神に
あゆみをはこぶなり。神にあゆみをはこ

ぶなり。

手習

琴平調子 琴一合
三絃二上り 三絃一

手ならふ。穉兒よ。難波津に。咲やこの花。冬
ごもり。今を春邊と。文字の花。書の林に。か
をらせて見よ。

新年の雪

琴平調子 三絃二上り 三絃一合

見わたすかぎり。野も山も。春にしられぬ。
花さきて。一夜のほどに。新しき。年となし
つる。今朝の雪。たのみ多かる。世のさまも。
さやかに見えて。めでたしや。

秋の七草

琴平調子 三絃二上り 三絃一合

秋の野に。咲きたる花は。何々ぞ。おのが指
をり。數へ見よ。錦を粧ふ。萩が花。尾花。葛ば
な。をみなへし。誰がぬぎかけし。藤袴。親の
な。さけの。撫子に。露をいのちの。朝顔の花。
合この七草の。花はしも。昔の人の。めでそ
めて。秋野の花の。うるはしき。其名は。今に。
高ま。とや。野邊に。匂へる。秋の七草。

秋の夜

琴平 関子 琴一 合
三絃二上り 三絃一

松虫の。なく音もいと。あはれなり。むぐ
らがおくの。夕まぐれ。合萩かさえだに。お
く露も。そよと音ふ。風ゆえに。玉とみだれ
て。さみしとも。いと、淋しき。をりからに。
高根を出る月の影。ちりもくもらぬ。光り
かな。合松ふく風も。一入の。けしきを添て。

てりまさる。合今宵の空の。さやけきに。ね
てやはひとり。あかしがた。月にうかる。
友あらは。鳥はなくとも。詠めあかさん。

小野の山

琴平 関子 琴一 合
三絃二上り 三絃一

わすれては。夢かとおもふ。おもひきや。と
なせの宮の。花ざかり。御供つかへて。よる

ひるわかず。君を八千代と。祝ひしも。天の
がほらや。交野の野邊に。御狩くらし。其
時々を。おもひ出れば。袖の露。合睦月ばか
りの。ことなれば。深雪ふりつ。道さへわ
かず。たとたとしくも。おとづれて。見あげ
まつれば。何となく。ものゝ哀ぞ。身にしみ
まさる。夢かうつゝ。かをのゝやま。雪ふみ

わけて。君を見んとは。

三の船

琴平関子 琴一合
三絃二上り 三絃一

花の都の。大井川。あそびもみつの。友をわ
け。合船のよそひは。からにしき。あやおる
波の。川よどに。おくれてのれる。みやびを
は。歌にも詩にも。しらべにも。かねてこゝ

ろを。筑紫琴。合つくしゝわぎは。しら浪に。
今もひゞくや。合いまもひゞくや。大井川。

表組

富貴曲

ふきといふも。草の名。めうがといふも。草。
の名。富貴自在。徳ありて。めうがあらせ給。
へや。

雪の朝

第一

雪ゆきの朝あしたのあらしは八かけむかよ梢すずたの花はなのちる引いて左一ツ風情ふてん。う七かけまハ

めめのささ枝たの花はなさ十かけまハけば四三三左二ツみみそそららにかかををるる月つき

影かげ。

第二

霜しもささゆるゆる秋風あきかぜやや雲井くもいのの鴈かりにに夕霧ゆふきりののおおとと

ししめめられられしし思おもををばばいいつつのの世よにかかははわわすす

れん。

第三

久ひさかかたたのの月影つきかげもも手てにととららばば消きええぬぬべべしし。

川かはのの瀬せににううつつろろひひてて。風かぜななききよよははもも涼すずしし

き。

第四

眺ながむむればればいといとだだにに昔むかしのの事ことののししののばばるる

つ ふう 風に さそはれて 月の都にのぼる
らん。

第二

淵瀬 さだめぬ あすか川 變ればかはる世
の ならひ。人の身の常なさは。昔も今もか
はらじ。

第三

ひく袖さへもかをりて。花とにほへるま
ごゝろ。天の橋立とほければふみも及ば
ぬ ことの葉。

第四

しのゝめの籬に。露をふくむあさがほた
まの葛 たをやかに。かゝるや花のおもか
げ。

第五

香爐かうろ 峯ほう の 眺ながめ も。富士ふじ にはいかに及およぶべき。

大内おほうち の 御簾みすだ より。雪ゆき の しらむ 曙あけぼの。

第六

芳野よし 川がは の 花はな いかに 棹さざな さすひまもあらじ

な。いは 波なみ 高たか き 山やま 風かぜ。四よ 方かた に 散ちす 花はな の 雪ゆき。

六段調

琴平 関子 琴三 合
三絃 木 関子 三絃 一

裏組

雲上

第一

雲くも の うへうへ の ながめながめ は。ありしむかしにか
はらねど。みしたままだれのうちぞたゞ。な
つかしやゆかしき。

第二

おもしろやさみだれ。はな花たちばなのはなにほ
 へり。ほとぎすをはなとずれて。みじか夜よな
 れどねられぬ。かすね

第三

なかなかにはじめより。なれずはものを
 おもほじ。わすれは草くさの名なにあれど。しの

おは人のおもかげ。

第四

おもひあまりせきかねて。うらみぬるよ
 のなみだは。とこすさまじやひとりたゞ。
 まくらに戀こひぞしらるゝ。

第五

むとし野のにゆきくれて。月つきをながめてく

さまくら。こひしき人ひとをゆめに見みて。うた
ねの袖そでしぼる。
六のちの五と四のうたよ

第六

のきをめぐるとんてき。ことのねにたと
へて。七年しちねんのよるのあめ。かつてしらぬゆ
めの世よ。
とわりのつめ二段
のちのわりのうたよ
十二のうたよ
六のちの六と四のうたよ
八のちの八
七のちの七

四季の友

第一

春はるたちくれればわがやどにまづさきそむ
る梅うめの花はな君きみがちと世よのかざしぞと見みる
ものどけきいろなれや。
八のちの八
五のちの五と四のうたよ
六のちの六と四のうたよ
八のちの八

第二

瀧たきのしら玉たま千代ちよのかす。岩根いわねにおつる五い

月雨だれの。雲間かいてらんニツ過行すぎほとぎす。たゞ九段られん一ひとこゑ
の七中かむれんをとづれ。

第三

月とかけまをのみ詠ながめても。かくばかりおしまるゝ。
秋ハ七六ニツの夜あきごとをいたづらむかむかに。すぐる人ハカケマこそ
つハカケマらハカケマけれ。

第四

神とかけま無な月つきしぐれても。いろかへぬ松まつがえの。
みどりうづめる白雪しらゆきは。とかへりの花はなな
らん。

友千鳥

第一

みちひたえせぬ。しほのやま。さしでのい

その友五ノツトちどり。君きみが御代みよをば。いく千代ちよと。
聲こゑもゆたかに。なきかわす。

第二

日ひかげのどけき。かすが野のに。わかなつみ
つ。萬代よろづを。いはふ心こゝろの。みちみちすぐまに。かみ
のめぐみめぐみを。いのらむ。

第三

たれかたれはあかん。ときときはなる。松まつのみどり
も。春はるはなほ。いまいまひとしほの。色いろみへて。な
がめなもふかき。このこのごろ。

第四

ううつしりゑてし。庭にわもせに。老おひそふ竹たけの。枝えだの。
しげみしげみ。しげくも見ゆる千代ちよのかげに。な
る。よよはひや。いついつまで。

第五

とがけがよ
 むかふもひろき。わたづみの。はまのまさ
まのしやうじふ
 ごとを。かぞへつゝ。世よのありかずに。とりな
とらふ
 して。ひさしきほどを。しらばや。
と十九

第六

ことぶきなれし。つるかめも。ちとせののち
とがけがよ
 は。しらなくに。あかぬ心こころにまかせつゝ。か
とがけがよ
とがけがよ

きりもあらぬゆくすえ。
とがけがよ

八段調はちだんのしらべ

琴平調子 三絃一合

亂輪舌みだれりんぜつ

琴平調子 三絃一合

榮る宮

琴平四子 琴一合
三絃二上り 三絃一合

年毎に。榮ゆる宮の。園の内。色香を競ふ。花
のころ。合池のかゞみを吹く春風も。錦を
あらふ水の面。合きらをかざれる。たをや
めが。みさをとる手に。ちりかゝる。合花は
白波。そでは雪。岸根に咲けるかきつばた。
合色をかわせる紫の。藤のゆかりぞなつ

かしき。樂のひびきはつりどの。琴の調
 にまちとりて。歌ふ聲には雲をもとめ。
 舞のたもとの乙女が袖は。加凌賓迦のこ
 ちこそすれ。

西行

琴平調子 琴一合
 三絃二上り 三絃一

われも昔は。ますらをの。眞弓つきゆみ。年

をへて。ひきたかへたる。あさゆふは。命な
 りけり。たび衣。こけのころもに。身を染か
 へて。心のちりの。袖はらふ。やほな世界に。
 いとしごの。いとしかわるは。昔の事よの。
 よしの山。合よしの山。こそのおりの。み
 ちかへて。まだ見ぬ花の。いろを。たづ
 ねたづねて。うた枕ふでのすさみの。すみ

染そめぎくらのうつろふ春はるの花はなの顔かほやせるす
がたに。笠かさきたなりを。水みづの鏡かがみに。かげとめ
て。しばし立たちよる。柳やなぎかげ。

薄霞うすかすみ

穿平調子 穿一合
三絃二上り 三絃一合

あづさ弓ゆみ。春はるの日ひかげも。薄霞うすかすみかすみて見み
ゆる。糸いと柳やなぎいつしかまいを。かけそめて。風かぜ

もぬるめる。野邊のべごとに。はやもえいづる。
初はつ若菜わかふかすゝなすゝしろ。すがやかに。雪間ゆきま
に見みゆる。若緑わかきどりかわらぬ色いろも。あさゝわや。
つみて祝いわわん。春はるの若草わかぐさ。合あうちむれ遊あそぶ。
おさなごに。かたをならぶる。姫松ひめまつのみど
りの空そらに。鳴なく田鶴たづは。千代ちよの聲こゑさへ。そへ
てけり。合あ千代ちよに八千代やちよの。聲こゑつみそへて。

かたみにあまる。若菜こそ。行末なかき。乙
女子がよわいをこむる。花がたみ。春の心
ぞ。長閑なりける。

紀元節

穿平調子 穿一合
三絃二上り 三絃一

雲に聳ゆる。高千穂のたかねをろしに。草
も木もなびきふしけん。大御代をあふぐ

けふこそ。たのしけれ。合うなばらなせる。
はにやすの。池のおもより。なほひろき。め
くみの浪にあみしよを。仰ぐけふこそ。た
のしけれ。合天津ひつきの。高みくら。千代
萬代に。うごきなき。基さだめし。其神をあ
ふぐけふこそ。たのしけれ。合空にかや
く。日の本の萬の國に。たぐひなき。國のみ

はしら。たてしよを。あふぐけふこそ。たの
しけれ。

四季詠

琴平明子 琴一合
三絃二上り 三絃一

あら玉の。としたちかへる。初日かげ。くも
らぬ御代の。長閑さや。やがてかすめる。四
方の山。梢こずゑも。いろそひて。初音ゆか

しき。鶯の。聲を。しるべに。梅が枝の。花のし
たひも。うちとけて。櫻がさねも。いつしか
と。合うすき一重の。なつ衣もりの。下露。た
まちりて。水に心ぞ。うつるなる。合たもと
すししき。秋風の。野邊の。千草に。合なく虫
の。音もふけわたる。よなよな。に。月もはえ
ある。けしきかな。合袖に。時雨の。神無月も

みぢ葉はさそふ。木こ枯がらしや。庭にはの錦にしきも。このごろ
 は。たは白しろ妙たえに。ふりつもる。雪ゆきに心こころも。冬ふゆご
 もり。春はるをまつ間まの。ねやのうづみ火び。

明治三十七年五月十八日印刷
 明治三十七年五月二十五日發行

(非賣品)

編輯者兼
 發行者

東京市本郷區本郷春木町三丁目廿七番地
 萩原源意

印刷者

東京市京橋區高代町四番地
 高島幸三郎



印刷所

東京市京橋區高代町四番地
 高島活版所

